出 張 報 告

報告日　令和３年１１月１５日

会 派 名	民友
報告者氏名	相澤宗一、佐藤和典、近藤由香里
種　　別	■調査研究（□行政視察）　□研修会　□要請・陳情　□各種会議
用　　務	いわき市地域防災交流センタークス之浜・大久ふれあい館
日　　時	令和３年１１月５日（木）　8:30～9:45
場　　所 （会場）	福島県いわき市
調査項目等	震災経験の伝承と防災教育について
概　　要	◆対応者 いわき震災伝承みらい館　いわき語り部の会 [redacted] 様 ◆いわき市地域防災交流センタークス之浜・大久ふれあい館 災害時の防災拠点機能といわき市役所の支所・公民館のまちづくり活動拠点機能を一体化させたもので、平成 28 年 10 月にオープン。東日本大震災とそれに伴い発生した津波で甚大な被害を受けたいわき市久之浜地区で津波発生時の避難用として建設された。 鉄筋コンクリート３階建て、延べ床面積は約２千平方メートルで、１階に市役所支所と公民館の窓口を置き、２階と３階に研修室や津波の教訓を後世に伝える資料室などを設けている。 災害発生時には、同ビルから海側 300 メートルの範囲の住民 276 人の緊急避難所として、避難スペースや３日分の水と１日分の食料等を保管した備蓄倉庫、非常用発電設備等の機能を備える。 ◆震災体験の伝承（語り部ガイド） ・いわき市久之浜町の一帯は３年前にインフラ整備が 98%完了。 ・東日本大震災当時は約６万人が避難したが、現在は約半数にあたる３万人が帰還。 ・いわき市の人口は 33 万人で、震災当時とあまり変わらない。福島原子力発電所付近から避難し、そのまま定住している人も多い。 ・久之浜町は震災当時の人口 6000 人だったが、現在は 5000 人弱。インフラ整備はされたが過疎化が進んでいる。 ・震災当時は 8.6mの津波が到来し、多くの家屋が流された。ガイド阿部さんの奥さんは民生委員をしていたため、見守り対象の高齢者と一緒に車で避難しようとしたが、津波により車ごと流された。ただし家屋の外壁に車が引っ掛かり、一命はとりとめた。

・津波による久之浜町の犠牲者は63名。寝たきりの人と介護者が多かった。避難先での低体温症で6名亡くなった。
・震災後に火災が発生し、71戸が全焼した。
・福島原子力発電所事故により、いわき市から自主避難勧告（市独自の判断）。市がバスを調達し住民は町内避難所（主に避難）へ着のみ着のまま避難した。

・避難後の留守宅は窃盗団により荒らされ、テレビ等が盗まれた。（当時はアナログから地デジに移行のため新品に買い替えた家庭が多かった）
・海岸部は住宅地だったが、津波によりほとんどが全壊した。その後、国が土地を買い上げ、津波緩衝帯用の防災緑地とした。
・久之浜漁港は震災前75億円市場で築地に魚介を出荷していたが、現在は週3日の試験操業をしている。震災当時は50人ほど漁港にいたが、沖合に船を出し、高台避難するなどして、犠牲者はいなかった。
・魚介類の放射線濃度は国の基準が100ベクレル／ｋｇ以下だが、久之浜漁港では自主規制として50ベクレル／ｋｇを超えたら出荷しないことにしている。

・震災から10年経ち、避難先で新たな生活基盤を築いている人も多い。放射線量は低減して、科学的な安全性は証明されても、帰還者は1割程度なのが、各自治体共通の悩みである。

所感等

【相澤宗一】
柏崎市も大きな震災を経験しており、その継承と教訓の発信を継続するためのメモリアル施設を有している。東日本大震災における津波経験、命を守るための伝承・取り組みに触れることで、自分たちの防災に役立てたいと思い訪問した。一番印象に残ったのは、お年寄りの被害者が多かったこと。その理由は、今までも大きな津波の予報に接しながら避難をしなくても大事がなかった経緯を皆が持っていたためであり、これは大きな教訓に値すると思った。また、福島第一原子力発電所からは32㎞離れているが、放射線の影響で余儀なく避難。語り部さんからは「見えない恐怖」という言葉があったが、放射線に関する教育もしっかりしないと避難行動にも影響が出るものと感じた。

【佐藤和典】
視察先の久之浜地区は、津波の高さ7.45m。約70名の方が震災の犠牲になった。地震・津波・火災・原発事故による全町民避難、その後の風評被害など、数々の災難を立て続けに経験した。それらを風化させないハード施設が「いわき震災伝承みらい館」であり、ソフトが「震災語り部」である。当日は、沿岸部の防潮堤、防災緑地の整備、住宅地の区画整理と高台移転、久之浜漁港から高台への避難階段の整備などを視察したが、被災地の現状や復興状況などの伝え方を柏崎でも参考にしたい。

【近藤由香里】
今回の視察では、柏崎市の市民活動センターまちからとの比較も含めて、いわき市における震災経験の伝承と防災教育を知ることができた。実際に震災を経験した語り部さんのガイドにより、当時の状況やそこからの教訓等を克明に知ることができた。また大久ふれあい館は防災教育拠点であると同時に、避難所としての機能も高く、施錠された状態でも、非常時にガラスを蹴破れば中に入れるようにするなど、津波被害の経験が生かされた構造となっていた。生きた防災対策・防災教育を体験できた貴重な機会となった。